

令和 4 年度

小 論 文

10 : 30 ~ 12 : 10

教養学部学校教育学科
一般選抜(中期日程)

注 意 事 項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙は 2 枚あります。1 枚は下書きに、1 枚は清書に使いなさい。
提出は 1 枚だけです。
3. 合図があつたら、解答用紙の指定欄に受験番号を記入しなさい。
4. 落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見いだした場合はすみやかに
申し出なさい。
5. この冊子は、持ち帰ってさしつかえありません。
6. 試験終了の合図があつたら、筆記用具をただちに置いて下さい。

課題文を読んで、以下の設問に答えなさい。

課題文

勉強とは、結局はこの自分の頭を回すことなのだ。データをインプットしたときには、その新しいデータについて考える。いろいろなものに関連させたり、そこからヒントを得て、別のものに展開させたりする。そういったことを繰り返すうちに、百に一つくらい現実的で有用なアイデアが生まれる。大部分は、捨てるしかないけれど、また別の機会に復活できるようなことだってある。

ものを関連させるには、似ているものを探したり、反対のことを考えたり、組み合わせを変えてみたりする。そういった「捏ねくり回す」ような思考を常にする。

観察された事象を抽象化することも、そんな作業では欠かせない。具体的なものから一旦離れて、本質を考える。具体的な問題は、本質を見えにくくするだけで、考えるうえで障害となるからだ。

発想とは本来、基礎的なものであり、抽象的なものだ。具体的なデータは二次。それらは、あとあと現場で辻褄を合わせるくらいしか意味がない。たとえば、建築のデザインは、大まかなスケッチを最初にする。これが本質である。これを、現場で沢山のスタッフが細かい寸法を合わせ、材料や工法を選択して実現していく。ほとんどの才能は、最初のスケッチに注ぎ込まれる。そして、その建築物は、設計者の名とともに歴史に残るのである。

頭が創造的な活動をしているときに、その人の才能が際立ち、さらにその才能が成長する。すなわち、これが勉強の本質である、と行って良いだろう。

人から教えてもらえるのは、単なる体験のレベルである。技術の基本を教わることはできる。ちよつとしたルール、躰からだの使い方、何が良くて、何が間違っているのか、などのディテール。これらの基礎的な部分は、それぞれのジャンルで体系化され、言葉で伝達できるように整理されている。だからこそ、教えてもらうことができる。この状況が、学校というものを成立させ、教育の

大部分のステップとなっている。

しかし、創造的な体験は、自分の頭の中から湧き出るもの、極めて個人的な体験であるため、外部からは、せいぜいヒント的なものしか得られない。しかも、そのヒントさえも自分が見つけるものである。「これがあなたの上達のヒントです」と教えてもらえようなものでは基本的にない。もし外部から与えられたら、それはもう創造的ではなくなるからだ。

一対一の個人レッスンを受けるような状況が長期間継続し、個人の成長までも見守り、その人の個性を十分に理解した指導者ならば、ヒントが幾分的確に出せる、という程度だろう。学校のように多人数を指導しなければならない先生には、まったく不可能な行為といえる。

ある個人をずっと見守っているのは、結局は本人以外にいない。つまり、もし学ぼうと思ったら、自分を先生にするしかない、という理屈になる。

自身を見守るには、自分を客観視できなければならない。自分がどう考え、どうしたいのかを常に観察する別の自分が、あなたを指導する適任者である。

自分が感情的になったときも、その冷静な先生が、あなたを落ち着かせるだろう。この先生は、周囲とあなたの関係にも目を配って、的確なアドバイスをしてくれるから、あなたは、もう周囲を気にすることはない。むやみに他者と自分を比較して、傲^もつたり、あるいは僻^{ひが}んだりする必要もない。

感情的なエネルギーは、自分の創造にぶつける。自分の感性を自分の思考に注ぎ込むことができるようになれば、創造的な「勉強」が可能になるだろう。結局は、そういう道理で、本当の勉強の楽しさが湧き上がってくるものだ、と考えられる。

繰り返そう。学^アびたかつたら、自分を先生にすること。

例外は、初歩の段階だけ。初めだけは、他者から学べる。それは、千歩の道の最初の一步だけだ。それくらいの割合だろう。あとは、自分の歩き方で進む。勉強とはそういうものだ。

辛かった「勉強」が楽しい体験に変化した理由として、最も大きいのは「自分で選んだ」からである。押しつけられたものではない

く、自分が好きなものを選んだ、その自由さに基本的な楽しさの元がある。

逆にいえば、学校で教わった「勉強」が、選択できないテーマだったのだ。何故、選択できなかったのだろうか？

それは、世の中に何が存在するのかわからず知らず知らず子供だったためだ。教育とはまず、この世に存在するいろいろなもの、あらゆる分野の知見を教える行為である。つまり、子供たちは選択したくても、何があるかを知らない。大人が、選択できるように成長したのは、いやいやでも広いジャンルを勉強したおかげなのだ。

また、好きだからそれを選択しよう、と思った人は、自分なりに少しは調べたり、試したりしているはずである。だから、その分野の先生を見つけたときには、既にある程度のレベルに立っている。

大人の勉強は、子供たちの勉強とは、スタート地点が違う。たとえば、少なくとも言葉が理解でき、文字が読め、受け答えができ、自分の考えが述べられる。したがって、大人を相手に教えることは、子供たちを教える学校よりも、ずっと簡単だ。

大人（特に老人）相手の教室やセミナーは、商売としても非常に多い。高齢化社会でもあり、需要も増している。学びたい人で溢れかえっている、と表現できるほどだ。

ところが、ここで大勢が見落としている点がある。

きつと多くの人たちが、この誤解をしているだろう。

それは、「学びたい」という気持ちと、「教えてもらいたい」と解釈してしまう間違いである。「勉強」とは、先生について教える乞うもの、と思いついて入っている点、問題なのだ。そう考えてしまう人たちは、その点こそが、「勉強」が楽しくなかった理由の一つであることを忘れている。

人から教えてもらおう、と考えることで、「学ぼう」という主体性の大半が失われてしまう。自分の頭で考え、自分で試し、自分で体験するという楽しさを、放棄しているようなものである。

なんとなく、子供のときの学校のイメージがあるから、それが「勉強」というものだ、と錯覚しているのだ。そして、最初のうちは、先生から出される「宿題」なども、懐かしく感じて、ちょっと嬉しくなってしまうのである。

おそらく、長続きしない結果になるだろう。自分の成長が感じられないため、だんだんストレスになる。教室への足は遠く。勉強がしなかったのに、教えてもらうことが重荷になる。その重圧感から、再び、勉強嫌いになるかもしれない。ただ、自分でやり始めたことだから、と自身を奮い立たせるのだけれど、それもいずれは諦めることになるはずである。

「教えてもらう」という行為が悪いわけではない。人は一生、誰かから教えてもらう体験を続ける。人から学ぶことは、とても大切な条件だ。ただ、この人から学ぼう、と身を預けてしまう姿勢が間違っている。

「じゃあ、どうすれば良いのですか？」とおっしゃりたい方がきつといることと想像する。そのように質問する姿勢もまた、人から教えてもらいたい、他力本願といえるだろう。

ここまで書いてきたように、「勉強は、自分で考えることが基本であり、本質なのだ。自分の頭で思考することが、すなわち「勉強」だといっても良い。したがって、どうすれば良いか、という質問には、こう答えるしかない。

「それを考えることから始めましょう」

質問をすることは、重要だ。質問が悪いわけではない。常に問うこと。何事にも疑問を持ち、何が問題であるか、自分は何がわからないのか、を認識する。ここがすべての「勉強」のスタートである。

そして、あらゆる質問に、まず自分が答えよう。つまり、自問自答しよう。

質問を考えたら、次にはその答を考える。考えることができないのなら、何故考えられないのかを考える。なにか足りない情報があるから考えられないのか。想像もできないのだろうか。間違っているか正しいか、判断がつかないからだろうか。

一般に、想像はどんな人でもできる。その人の知能、知識に合わせて、その人なりに想像ができるはずだ。したがって、質問を思いついたら、それに対して、何通りかの答を考えてみる。どんな可能性があるのかを考える。それらの可能性の中で、最も正しいようなものはどれか、とまた考える。同時に、どうして自分はそう考えたのかを考えてみよう。

このようにして、^イ自分なりの考えを持つことは、正解を知ることよりもはるかに価値がある。研究者が日々していることは、これだ。なにしろ、誰も答えてくれない。誰も知らないことを自分に問う日々なのである。

設問一

傍線部アで、筆者は「字びたかつたら、自分を先生にすること。」と述べていますが、それはどういうことですか。課題文に即して、二〇〇字以内で説明しなさい。

設問二

傍線部イで、筆者は「自分なりの考えを持つことは、正解を知ることよりもはるかに価値がある。」と述べていますが、あなたはこれについて、どう考えますか。課題文を踏まえながら、あなたの考えを、自分の体験や見聞を交えて八〇〇字以内で述べなさい。